S. Ashina

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化
１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家
３．キリスト教の国教化
４．三位一体論の形成過程とその意義
５．研究発表１
６．修道制の展開
７．キリスト教教父２――アウグスティヌス 12/3
８．中世キリスト教世界のダイナミズム 12/10
９．キリストと文化――スコラ的文化総合 12/17
10. 研究発表２（「キリスト教学研究室」にて）：張、立川 12/24
11. 自然神学と歴史神学 1/7
12. イスラームと１２世紀ルネサンス 1/14
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」） 1/21

＜前々回＞三位一体論の形成過程とその意義

（１）三位一体論の形成と正統・異端

１．歴史的コンテクスト：国教化→政治宗教・政治神学
正統教会―正統教義―正典化
２．国教体制：宗教と政治の相互補完、帝国の統一のための宗教の統一（正統教会の成立）
３．ニカイヤ公会議(325)における決定と争点：
父と子のホモウーシオス（同本質）、アレイオス派とアタナシウス(～ 373)派
４．異端：養子説・仮現説・様態説→三位一体論とキリスト論との錯綜した議論・論争
「キリストはだれか・何者か」、キリストと神（父なる）との関連
キリストにおける神の働きと救済の確実性、神の唯一性
旧約聖書と新約聖書の関連性の問いでもある。

（２）正統教義：三位一体論（キリスト論）

５．ドグマ（教理）とは
(1)防御的意図：何であるかよりも、何でないか（異端への防衛）
(2)実践的意義：救いの確実性をめぐって（キリスト論における救済論的意味）
① 救済論的意図
② 論理的整合性、という二つの要求
６．三位一体論の前提（ティリッヒ『組織神学・第１、３巻』新教出版社）
1.宗教史－類型論 2.神的生命（生きた神）の経験 3.キリスト論
７．神は、父・子・聖霊の三つのペルソナ（位格）と一つの本質の三位一体の存在。
東西教会における表現のずれと解釈の幅
本質 位格
西：substantia ----- persona
東：ousia -----hypostasis
↓
東西教会の分裂。アウグスティヌスの三位一体論
８．内在的三位一体と経綸的三位一体
９．一神教的な伝統とイエスの神性の経験との統合の試み

（３）古代キリスト教パラダイムの意義

10. 古代地中海世界の文化的政治的状況への適応＝ヘレニズム世界への土着化
＝正統的なキリスト教の確立
ヘレニズム的なもののキリスト教神学への受容

聖書正典の完結、教会の信仰の伝統、君主的な司教職、
聖書解釈への中期及び新プラトン主義的思考の適用。

11. キリスト教、キリスト教神学の変貌：
神の人間との根本的二元論（霊と身体）、この二元性の「神人」キリスト教を通しての克服。
↓
イエスの十字架・復活から受肉へ重心が移る。
聖書の物語的語りから宇宙論的ビジョン・存在論的な概念表現へ
神の歴史的な活動から神それ自体における永遠性へ
これはキリスト教の逸脱か？

12. 三位一体論の政治的含意
モルトマンの解釈：地上の絶対君主に対応する神の「一性」に対する「三」の保持
モナルキア
帝国のイデオロギーとしての神学に対する批判としての三位一体論

13. 古典的信条の定式化の規範性、あるいは相対性
キリストが神であり人間であるとすれば、古典的信条の定式は規範的でありかつ相対的、また聖書テキストも正典であると同時に人間的文献。
↓
古典的信条の定式を聖書テキストによって相対化する。
聖書テキストを人文学的諸方法による聖書学によって批判的に読む。

14. 古典的定式の改訂の試み（現代）
・バルト、ティリッヒ　・プロセス神学　・「弱い神」の系譜、北森嘉蔵・・・
ポイントは、聖書学的研究。聖書の規範性。

６．修道制の展開

（１）修道的宗教性の普遍性とキリスト教修道制の起源

１．修道的な宗教生活は、キリスト教にかぎったものではなく、多くの宗教が共有する生き方、生き方の伝統である。孤独な超人的な修行（独居）と共同的な修行（共住）

２．キリスト教修道制の源泉・起源。
個々の宗教の修道制にはそれぞれ特有の歴史的起源が存在する。ユダヤ教からキリスト教へ（？）。

３．宗教的生の形態としての修道
・独居と共住（孤独と交わりの相補性）
「独りで住む者」、「隠れ住む者」　→　独住者、隠修士
「共同生活」（独住者の集団）　→　共住、修道院：エジプトのパコミオス（292/4-346）
古代においては、様々な形の修道生活が現れ混乱が生じる。異端視される放浪修道士、アウトロー的存在。シリアの頭柱行者シメオン（c.389-459）
・使徒的生活（via apostolica）の理想：キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。
・指導者のもとでの修養の意味：瞑想における異常心理（幻覚による精神錯乱）への対処。神と悪魔の「識別」の必要。経験者への相談。
Cf. 「異言」の場合：「異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい」（1 コリント 14:13）

（２）キリスト教修道制の歴史的展開――古代から中世へ

・現在の研究状況：キリスト教修道制と異端（たとえば、グノーシス主義）との関連。
正統と異端とを単純に分離することはできない。
・エジプト　→　東方教会（正教）　→　西方教会（カトリック）

４．エジプト

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父

修道士の理想的模範としてのアントニウスの禁欲的生活

世俗を離れ砂漠で修養する隠修士（禁欲的行者）の散在的集団

アタナシウス(296-373)の作と言われる『聖アントニウス伝』

↓

隠修士的形態から共住生活へ（パコミオス）

共同生活の規律とそれに対する服従、清貧

修道制は、パレスチナ（４世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる)、シリア（シメオン）へ広がる。

５．東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス（-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人)：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

６．アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』(創文社)

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定（cf.「第三会則」）

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く（『修道士の労働について』)。

祈り、説教、学問などに集中するために、労働の義務を免除されており、托鉢で食べ物を得るのが当然との論理（労働しない権利）に対して。パウロの模範。怠惰な放浪修道士の偽善的生活などによって、アフリカ管区における修道士の労働倫理は危機的状況であった。

７．アイルランド、学者の島

５世紀におけるパトリック（アイルランドの守護聖人）のアイルランド伝道。

↓

６世紀より、修道制の発展。厳しい修行と学問の愛好。

ペレグリナティオ（異郷滞在、異郷遍歴)：修道院長が修道院を突然譲り渡して、行き先も告げずに遠国に旅立つなどのパターン。魂の救いのために新しい故郷を求めるという贖罪的な意味を伴った禁欲的動機に基づく行為。

コルンバヌス（-615）のガリア伝道

『修道士規定』『共住生活規定』：アイルランド同様に厳格な会則。

↓

７世紀以降のガリアの修道院の発展。それに伴い（フランク王国の政治的統一と教会整備という新しい時代状況)、アイルランド系修道士の影は次第に薄れてゆく。

『ベネディクト会則』の普及。

８．ドイツ：ドイツ人の使徒ボニファティウス(c.687-754)

フルダ修道院(744)、ベネディクト会則の採用。

（３）ベネディクト修道会と修道院改革の歴史

９．ベネディクト会則とグレゴリオス１世(590-604、修道士から教皇になった始めての人物)

・モンテカッシーノ修道院（525）＝ベネディクト修道会の設立。

・『ベネディクト会則』(530/534、ただし原本は喪失)

修道生活の入門という意味。入門書としての優秀さ。

東方やアイルランドの修道制のように厳格な孤独な修行を要求せず、中庸の精神で生活し、労働や定住を義務づけることによって修道院の経済的自立を図り、共同

体としての修道院の運営を機能的に組織化した。修道院の自律性を確保するとともに、西欧に形成されつつあった農村社会（世俗社会）に適応する。

↓

修道院の西欧的形態の確立。

10. クリュニー修道院(910-)

修道院の世俗化の進展に対する修道院改革運動（11 世紀のグレゴリウス改革との関係は議論が分かれる)。『ベネディクト会則』の遵守。

第二代修道院長オドー(926-942)：教皇レオ七世の特許状によりクリュニーは教皇直属→ 991 年には司教権を排除、修道院の強大な系列的組織化（修道会、第五代修道院長のオデロー)。

マリア崇拝（5 世紀にビザンツで現れ、シリア、エジプトに普及、ローマには 7 世紀)、荘厳さな典礼（音楽）

11. シトー会(1098-)：クリュニー派修道士の規律弛緩への批判。『ベネディクト会則』の厳格な遵守。清貧。クリュニーの中央集権的体制に比べ民主的な形態。『愛の憲章(カルタ・カリターティス)』

封建領主的諸収入の放棄、労働の重視（開墾)、経済的自立（修道院経済)。

額に汗する者こそが真の修道士であり、労働は神の栄光のため。

クレルヴォーのベルナール(-1153)の説教活動、異端に対応（アンリ派の異端を調査し、正統信仰に引き戻す）

11 世紀後半から 12 世紀にかけて、異端的民衆運動が西欧の各地に発生。一般の信徒集団の間にも、使徒的生活の理念が影響し、異端運動へと発展（教会の伝統的な教義や聖書解釈からの逸脱)。「キリストの貧者」、「リヨンの貧者」、カタリ派、ヴァルドー派。

アルビジョア十字軍

12. 13 世紀の托鉢修道会：民衆の宗教性のうねりに対応するために（都市、イスラーム)。

・ドミニコ会：弁舌と学問の修道士（異端の論駁、異端審問)、労働から学問へ、大学。

・フランシスコ会（小さな兄弟の修道会)：民衆の新しい宗教性を求める敬虔な運動を教会的秩序の内部に取り戻す。『第一会則』(1221 年、マタイ 19.21、マタイ 10.9-10、マルコ 8.34 を三箇条とする。)、『1224 年の会則』。清貧。

・カルメル会、アウグスティヌス会

13.「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。」

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

（4）アッシジのフランチェスコ(1181-1226.10.3)

「この人物は、近代的でダイナミックな中世が誕生した一二世紀から一三世紀への転換期という決定的な瞬間の只中にあって、宗教・文明そして社会を揺り動かしたのだ。」(ルゴフ、v)

教会制度の周縁に立ちつつも異端に陥ることなく、新しいキリスト教社会にふさわしい使徒的活動のモデル、托鉢修道会という新たな修道会の勃興、一種の生態学的次元におけるキリスト教霊性を豊にした。

14. フランシスコ会(Ordo Fratrum Minorum)の創始者。

富裕な織物商の家に生まれ、青年時代は放逸と快楽に生きる。1202 年のペルージャと

の戦争に参加し、一年間捕虜となり、その後病の中で、主の幻を体験し回心。サン・ダミアーノ教会などの修復に着手。福音書（マタイ 10.7-19）に感動し、キリストに従い清貧と愛に生きることを決意し、洗足説教者の服をまとい、説教をはじめる(1208.2)。仲間が増え、会則を整え、ローマで教皇インノケンティウス３世の承認を受ける(1209)。聖地のイスラム教徒に宣教するために、霊的十字軍を起こし、殉教者を出す。会員が増え、分裂の危機が生じたため、1221 年に総会を開き新しい会則を作り、一般信徒の会として第三会を発足させる。1224 年 9 月アツヴェルナ山で断食中、キリストの聖痕を受け、巡回説教中に目を患い視力を失う。病気のさなか、「兄弟なる太陽の歌」（Carmen solis）を作る(1225)。死後列聖される(1230)。

＜マタイ 10 章＞

7 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。9 帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。11 町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。12 その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。13 家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。14 あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようともしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。15 はっきり言っておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」

16 「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。17 人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。18 また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。19 引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。

15. キリストに倣うという生き方（清貧に生きる）

・十字架からの語りかける声、「フランチェスコよ、行って私の家を修理するのだ」。
　荒れ果てた教会堂（サン・ダミアーノ教会）の修理
　カトリック教会全体の、霊的な意味での再建
　　教皇権の絶頂期（インノケンティウス三世 1198-1216）＝危機

・「貧しい人々は幸いである」
　この言葉を実践すること → 貧しい人・ハンセン病患者と共に

・謙虚で愛に生きる。怒らない・不平を言わない。
　「私は、主イエス・キリストにおいて戒め、勧める。兄弟たちは、全ての高慢、虚栄、嫉妬、貪欲、現世のことについての心配とおもんばかり、そしり、つぶやきを避けるべきである。」

・神の被造物としての自然
　→ 愛の交流・連帯性における交わりの対象としての自然
　　cf. 支配の対象としての自然（＝物）

16.『兄弟なる太陽の賛歌』

いと高き 全能の善き主、
讃美と誉れ 栄光と祝福は
みな あなたのもの

それらは
いと高き　あなたにこそ　ふさわしく、
だれも　よく　そのまことを
語る者はない

たたえられよ　我が主、
あなたから造られたもの
わけても　貴き兄弟　太陽によって。
彼は昼を造り、
主は　彼により　我らを照らす。

彼は大いなる光によって
美しく照り輝き、
いと高き　あなたの
み姿を映す。

たたえられよ　わが主、
姉妹なる月と　あまたの星によって。
あなたは　それを　大空にちりばめ
美しく　貴く　きらめかす。

たたえられよ　我が主、
兄弟なる風　大気や雲
さま変わる　天の事象によって。
あなたは　それにより
造られた　全てを支えられる。

たたえられよ　我が主、
姉妹なる水によって。
それは　みなを生かし、
おごることなく　貴く
また清らかに澄む。

たたえられよ　我が主、
あなたは　兄弟なる火によって
夜の闇を照らす。
彼は美しく　心地よく
たくましく　力あふれる。

たたえられよ　我が主、
我らの母　姉妹なる大地によって。
それは　我らを　育み、
草花を　とりどりに染め
くさぐさの実を　結ばせる。

たたえられよ　我が主、

あなたへの　愛のため
ひとを赦し　病を忍び
苦しみに耐えるものによって。

幸いなるかな、
心安らかに　忍ぶ者。
彼は　いと高きあなたの
とわの冠に　ふさわしい。

たたえられよ　我が主、
我らの姉妹　肉体の死によって。
生けるものは　だれも
その手から　逃れることがない。

禍なるかな、
神に背いて死の時を待つ者！
幸いなるかな、
あなたの御旨を　生きる者
二度の死も　彼を損なうことはない。

我が主をたたえ　ことほぎ、
深き　へりくだりとともに
感謝のうちに　彼に仕えよ

17. フランチェスコの信仰の遺産→時代を超えて、近代、現代へ
・物質的な豊かさの中にあって、信仰的に生きる生き方。
教会権力の絶頂期におけるキリスト教的信仰の危機。
聖書のキリストに帰れ　→　キリストのように生きる
・信仰のことを聖職者にまかせるのではなく、信徒が自分の生活を信仰的に生きる。
「新しい敬虔」（devotio moderna）へ向かう動向。
俗人世界の宗教生活への参与の度合いが高まる、ラテン語から俗語へ
伝統的な修道会か、あるいは新しい兄弟会か
・環境危機の中で、キリスト者は自然との関わりをいかにして回復するのか。

＜参考文献＞

１．今野國雄『修道院』近藤出版社、『修道院――祈り・禁欲・労働の源流』岩波新書。
２．戸田　聡『基督教修道制の成立』創文社。
３．久松英二『祈りの心身技法――十四世紀ビザンツのアトス静寂主義』京都大学出版会。
５．トマス・ア・ケンピス　『キリストにならいて』岩波文庫。
６．エリク・ドイル　『現代に生きる『太陽の賛歌』　フランシスコの環境の神学』
サンパウロ。
７．レオナルド・ボフ　『アシジの貧者・解放の神学』エンデルレ書店。
８．ジャック・ルゴフ　『アッシジの聖フランチェスコ』岩波書店。
９．川下勝　『アッシジのフランチェスコ』清水書院。
『太陽の歌――アッシジのフランシスコ』聖母文庫。
10. ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。